

薬剤耐性の仕組み解明

福島医大のぼうこうがん研究



福島医大
医学部泌尿
器科学講座
の真壁俊太

助手(31)＝写真＝らの研究チームは、ぼうこうがんの治療薬が効きにくくなる薬剤耐性の仕組みを解明した。耐性をつくっていた原因を阻害する薬を併用することで、薬物耐性を克服できる可能性が明らかになり、治療薬の効果を持続さ

せる新たな治療戦略の開発につながるという。

医大が25日発表した。ぼうこうがんは国内で年間約2万人が罹患し、特に「筋層浸潤性ぼうこうがん」は再発や転移を起こしやすい。がんの進行にはFGFR（線維芽細胞増殖因子受容体）というたんぱく質の異常が関係し、FGFRの阻害薬「エルダフィチニブ」が一定の効果を示すことが

知られている。ただ、治療を続けるうちに薬物耐性ができて効果が持続しないことが問題になっており、さらにFGFRの一種「FGFR1」を高発現する筋層浸潤性ぼうこうがんについては、治療薬の効果や耐性が明らかになっていなかった。

真壁氏や泌尿器科学講座の小島祥敬教授、生化学講座の西田満教授らによる研究チームは「FGFR1」を高発現する筋層浸潤性ぼうこうがんの細胞を用いて「エルダフィチニブ」の作

用を解析。その結果、治療を継続すると、がん細胞内で「MET遺伝子」が増幅し、経路を活性化させて「エルダフィチニブ」の耐性をつくっている仕組みが判明。MET阻害薬を併用すると、耐性を効果的に抑制できることが分かったという。研究成果は英国の学術誌セルデス&ディージーズに掲載された。